

中国A市の事例 唯物論と都市伝説

大塚英志

浅野龍哉



中国にも

現地で採集した中国都市伝説資料集
と描き下ろしまんがを収録!

学校の怪談

があった!?

私たちの現在の鏡像としての検閲と動員をめぐる

「都市伝説の政治学」



中国A市の事例

唯物論と都市伝説

大塚英志・浅野龍哉

星海社

395



SEIKAISHA
SHINSHO

第1章 呼吸する都市 北京都市伝説の予備的研究 大塚英志・浅野龍哉 7

- 序 都市を読み直す 8
- 1 タクシードライバーと都市伝説 9
- 2 都市伝説研究の二つの動向 11
- 3 オンライン上の北京都市伝説 14
- 4 心意現象としての都市伝説 20
- 5 都市伝説に見る北京の「ウチ」と「ソト」 23
- 6 南北の聖なるラインと異界への回路 28
- 7 呼吸する都市・北京 35
- 終わりに 今後の課題 41

まんがで読むA市都市伝説

採集とまんが 浅野龍哉

くるみの木の謎 47

バスケットボールをする首なし幽霊 50

図書館の閉館時間 52

第2章 唯物史観と中国都市伝説事情

大塚英志

53

まんがで読むA市都市伝説

採集とまんが 浅野龍哉

主楼の彫像 89

C大学から発見される骨 90

赤いチヨッキ 92

第3章

中国における口承文芸の政治化

民話工作と文革 大塚英志

95

1 民話の政治利用 96

2 毛沢東民話の「創造」 102

3 民話工作と故事員 114

4 投稿型都市伝説雑誌の登場 120

5 文革と都市伝説 125

6 再帰化する都市伝説 132

まんがで読むA市都市伝説

採集とまんが 浅野龍哉

R大学の眼 137

赤い実習室 138

S大学の門 140

女子寮の幽霊 141

白い服の男
142

補論

オンラインの時代のための情報民俗論ノート

柳田國男「世間話の研究」をどう読むか 大塚英志
145

- 1 ジャーナリズム論としての「世間話」の研究 146
- 2 「世間話」は「ハナシ」か「カタリ」か 160
- 3 生成する都市伝説 176
- 4 宣伝戦と大衆操作 205

北京都市伝説集 採集 浅野龍哉
225

あとがき
268

第
1
章

呼吸する都市

北京都市伝説の予備的研究

大塚英志

（国際日本文化研究センター・教授）

浅野龍哉

（国際日本文化研究センター・海外共同研究員）

※肩書はいずれも二〇二四年当時

序 都市を読み直す

「妖怪」に民俗学的アプローチする時に重要なのは、それを「現在」の文脈でいかに捉えるかにある。何故なら柳田國男の民俗学は現在学であるからだ。中国妖怪学研究が民俗学的になされるなら現在の中国に「妖怪」は「生きて」いるのかをやはり問わねばならない。そう問うことは、しかし、言うまでもないことだが、UMAの類を「いる」と主張することではない。

コロナ禍の前、北京の街を歩いていると看板や信号機のボタンの脇にウサギの落書きが数多くあることに気がついた。写真を集めて掲載しているサイトもあった【図1】。注意深く歩いていれば、一日に一つか二つは発見できた。

無論、このウサギは「妖怪」を描いたものではない。作者が不詳の——というよりも匿名の作者によるといった方が正確だが——graffitiとも呼ばれるストリートアートの類の一つである。恐らくは著名なアーティストの作ではない。しかしウサギマークを何気なく探すようになると、街並みの、それまでは目を向けなかった場所に自然と視線がいき、そして描かれた場所の前で立ち止まることになる。それだけで北京の



図1 オンライン上に見られた北京の街頭のウサギのグラフィティ

風景は思いの外、違った風景となる。つまりウサギマークはそれに気づいた者に、北京という都市空間のいわば「読み直し」を求めているとさえいえる。

とはいえ、匿名の作者がそこまで深い思慮の下にウサギマークを落書きして回ったとまでは思わない。だが、本稿ではこのウサギマークとそれが私たちに暗黙のうちに求めた都市空間の「読み直し」を「現在」における妖怪論の一つのモデルとして提案してみようと思う。

1 タクシードライバーと都市伝説

それでは改めて問う。

北京に妖怪はいるか。

出会うことはある。例えば、外国からの来訪者であるぼくはタクシーに乗ると、通訳を介して乗務員からこんな話を聞くことができる。

近隣に住んでいる老婆が帰宅途中に突然死した。その時、一匹の猫が通りかかった。すると、老婆が蘇よみがえった。しかし、その顔は半分猫で半分人間となっていたという。

「猫ばあさん」という妖怪の話だ。

乗務員の話によれば一九九五年、彼の出身地の黒竜江省哈爾濱市での出来事である。北京の「たった今」の妖怪譚ではないが、地方都市の現在に近い出来事であるとされる。無論、彼はこの話を信じているわけではない。大塚の方から通訳を介して、あなたの故郷に何か不思議な話が伝わってないかと訊いた結果、返ってきたものの一つである。

この例のように、現在に近い時代、近代化の進む都市空間において、半信半疑で流布する口承の怪談を「都市伝説」と呼ぶ場合がある。柳田國男は「世間話」と呼び、研究者の立場や帰属する領域によっては「現代民話」「現代伝説」などと呼ばれもする。「口承」と記したが、口承の文化と相性の良いオンライン上でも都市伝説が語られる。

タクシーの乗務員が都市において都市伝説の伝承者であること（重信、一九九九）や、オンラインが伝承の場である事情は北京も東京も、恐らくはそれ以外の地域も変わらない。「学校の怪談」と伝承の場を限定するアプローチもあるが（常光、二〇一三）、後述するように北京の各大学の学生寮は都市伝説の宝庫でもある。こういった都市伝説は日本では学術的な研究対象となる一方、児童文学やホラー映画などの大衆文化の豊穡なアイデアのソースともなっている。匿名というより口承やオンラインの上で幾度も語り直され成長していく都市伝説の担い手は柳田國男が大衆文化の担い手として定義した「群れとしての作者」（柳田、一九四七）に正確に対応している。

さて、この都市伝説の学術的研究はフランスにおける「オルレアンの噂」の流行と分析によつて始まったが（モラン、一九九七）、日本においては一九八〇年代初頭、「口裂け女」の都市伝説が流行し、その変化を定点観測的に追った野村純一の研究がよく知られる。野村は伝承の過程で都市伝説が物語の構造に準拠して形式を獲得していくことを指摘している（野村、一九九五）。

2 都市伝説研究の二つの動向

日本の民俗学において、都市伝説研究は大きく分けて二つの方向性がある。

一つは「情報」としての民俗文化へのアプローチ手段としてである。

柳田國男は都市伝説を「世間話」と呼んだ。厳密には「世間話」は都市部に限定されず、近代以降の都市化するムラ社会をも伝承母体として包摂するが、柳田の定義で重要なものは「世間」を「自分たちの共に住む以外の地、広く他郷を総括」（柳田、一九三二）する語とした点である。その定義に基づき、共同体の外部からもたらされる情報を「世間話」とした。共同体の外部、つまり異界や異郷を「世間」に含めるとすれば、柳田が『遠野物語』で集めた、その時点でリアルタイムに流布していた山人や河童の説話や、『山の人生』などの山人論で執着した山人譚の類もまた、理屈としては「世間話」に含まれるだろう。

しかし柳田の世間話論はメディア論としての側面を強く持つ。柳田はこの世間話論を「無暗に内緒話ばかり発達」した現代社会にあつて、「ハナシ」をいかに公共のものにしていくかという問いの下、メディアの役割を問う情報論として展開したのである。

このような立場には福田アジオが近い。福田は、「情報の時代」における民俗学の役割として「情報化時代が生み出した矛盾や難題を克服するため」（福田、一九九〇）を掲げる。いわば情報リテラシーの啓蒙として民俗学を位置付けるわけだ。これは柳田の世間話論が、メディアが情報を正しく伝える機関として発展できないと、「世間話」の負の側面である「ゴシップ」や「流言飛語の悪用せられる」（柳田、一九三一）社会が到来しかねないと危惧したことに通じる視点である。

日本の都市伝説研究のもう一つの立場は、生活空間の「場所性」に込められた大衆の「心意」を読みとろうとするものだ。

この立場を代表するのが宮田登だ。

宮田登は、弥勒信仰や流行神などの民俗宗教への歴史民俗学的研究で知られるが、都市化する社会や近世都市空間における怪異や妖怪についても、多く示唆的な論考を残している。

宮田の「妖怪」研究が特徴的なのは、妖怪が出現し、怪異が起きる「場所」や「時間」に着眼する点である。

現代の逢魔おうまが時ときを主として東京の魔所ましよにみながら、逢魔が時という時間と魔所という空間、いずれも特定された時間と空間を通して、別の世界に入り込む場所が我々の周辺にフォークロアとして伝えられているということを説明したい。（宮田、二〇〇一年）

宮田が言う「魔所」とは、現世と異界の境界となる場所で村境や橋、坂などがあげられる。「逢魔が時」とは、明け六つ暮れ六つの午前六時前後と午後六時前後の、異界との接触が起きやすい時間をいう。宮田はこういった妖怪・怪異の出現する時間にも注目し、それらの「特定された場所と空間を通して、別の世界に入り込む場所が我々の周辺にフォークロアとして伝えられてきた」と都市空間の怪異を説く（宮田、二〇〇一）。

このように宮田は「世間話研究」をその生活空間の「世界観を把握できること」に意義を見出しつつ、都市民の「心意」や都市の「世相」を再構成する手段としても積極的に位置付けようとした（宮田、一九八五）。「心意」や「世相」は、言うまでもなく先に述べた「場所性」や「時間」に関わる都市住民の感覚である。

中でも宮田が注意するのは、都市と伝統的なムラという異質の空間の接合点であり、筑波つくば研究学園都市という開墾地かいこんちの跡地に忽然こつぜんと創られた都市空間と、周辺のムラ社会との接合点である筑波大学学生寮に流布する都市伝説にも関心を払っているのが注目される（宮田、二

このような宮田の都市伝説研究は、東京渋谷の高級住宅地である松濤しょうとうに麒麟が飼われているというハナシを手がかりに、都市空間に都市伝説によって刻み込まれた意味付けを読みとる戸塚ひろみの論考などに広く援用されてきた（戸塚、一九八九）。

本研究は、宮田の主張を踏まえつつ、宮田や戸塚のように、単体の都市伝説と場所性の関係ではなく、「民間伝承の累積るいせきとして定着している民俗空間」総体への都市伝説による意味付けを解釈する試みをしたい。すなわち、北京に現在、流布する都市伝説を特に「場所性」に注目しつつ、北京居住者による都市空間への「意味付け」とみなし、それを指標しひょうにして北京市民の「心意」としての都市空間を可視化できないかという試みである。

3 オンライン上の北京市伝説

さて、既に述べたように北京においても（というより中国においても）、オンラインは都市伝説の新たな伝承母胎である。同時にオンラインは匿名の語り手による都市伝説のデータベースであるともいえる。

北京に「現在」流布する都市伝説を集めたサイトとしては、日本から検索をかけると「北京市都市伝説」が上位に来る。二〇一〇年当時の投稿をまとめたとされる同サイトを試みに

覗^{のぞ}いてみる。

例えばそこには以下のような都市伝説が報告されている。

〈北京最終バス〉

1992年頃、330番バスは頤和園^{いわえん}から香山^{こうざん}まで運行していた路線バスで、最終の330番バスは深夜である。ある若者がバスに座った。左右を見ると、車内は空っぽで、運転手と車掌、乗客が二人並んで座っているだけだった。この時、次の停留所に到着し、老人がやって来て、車がゆっくりと発進した。ちょうど5分後、老人は近づいて来て、若者の襟^{えり}をつかみ、「なぜ今、私をなじったのですか?」と言った。「すぐに止めてくれ、この件は終わっていない! 運転手はすぐに止める!!」

老人と若者が車から降りた後、若者は老人に「あなたは病気だ、誰があなたをなじったのですか?」と言った。

老人は「若者よ、私に感謝しなさい! あの手に乗っていた二人は足がないのに気がつかなかったのか」

その結果、翌日には最終バスが姿を消した!

これは北京の学生たちの間で最も広く知られているといっている都市伝説である。バスの系統番号や具体的な行き先にバリエーションがある。

また、日本の筑波大学学生寮や「学校の怪談」と同様に、大学の学生寮が重要な都市伝説の舞台であることがわかるのは以下の都市伝説だ。

〈赤いベストの話〉

物語は1994年、4号館4階の女子寮で起こったと言われている。ある夜、11時に寮の明かりが消えた後、女の子が水を汲みに水室に行った。暗い廊下を通り過ぎると、突然後ろから渋い声が聞こえた。「赤いベストが欲しいですか？」聞かれた少女は気味が悪くなり、急いで寮に戻った。数日間、少女は一人で水を汲みに行く勇気が出なかった。しばらくすると、少女はこの問題を心に留めなくなった。ある日、11時の消灯後、少女が一人で水室に水を汲みに行ったところ、また変な声が聞こえた。誰かが冗談を言っているのかと思い、「はい！」と答えてしまった。翌日、生徒たちが起きた後、その少女がまだベッドで寝ているのを見て、彼らは非常に驚いた。ベッドのキルトを持ち上げると、少女はまるで赤いベストを着ているかのように真っ赤な血で覆われ、絶命していた。この話は、前のクラスの前輩から後に来た後輩に至るまで、ずっと広まっていたとい

う。後で知ったが、4号館4階の女の子は深夜に亡くなっており、死因は脳出血だった。

日本でアニメや映画にもなった「トイレの花子さん」や、戦時下の日本で流布したとされる「赤マント」を想起させるが、民俗学的な都市伝説研究においては、どこが出自かは必ずしも重要でない。それよりも流布する場所において、いかにローカライズされ、生きた形となるかが重要である。

先のサイトには二〇一〇年当時とされる三十二の都市伝説が投稿されている。

北京都市伝説の特徴を仮説的に把握するため、このオンライン上の資料の分析を改めて予備的に行ってみる。

このサイトを用いるのは、本研究の都市伝説調査期間である二〇一六年十二月から二〇一七年十一月の時点に先行する資料だからだ。

まず「妖怪」研究である以上、怪異現象の主体が何者なのかが当然、問題となる。「赤いベストの話」であればベストについて問う女の子である。また「北京最終バス」であればバスに乗っていた、足のない乗客ということになる。

その結果、三十二例中十七例が「幽霊のごとき存在」が怪異現象の主体であることが判明した。ここには写真に写り込んだ霊（いわゆる「心靈写真」）や生きた人間の霊が身体から離

れる幽体離脱を含む。つまり半数以上の怪異現象が「幽霊」に起因するのだ。「足のない乗客」「トイレの壁の顔」「存在しないウエイター」なども「幽霊」に近いイメージである。それ以外では三例が動く死体である。二例が動物、一例が石像と超能力者などである。

これだけでは北京都市伝説の特徴と断定できないが、主人公の多くはどうかや「妖怪」ではないようだ。漠然とした「幽霊」が怪異の主体であって、その意味でキャラクターとしての属性が不明瞭である。つまり「妖怪」としての名称や特色ある外見や行動が具体化されていないのである。

日本の都市伝説では「口裂け女」「トイレの花子さん」に始まり、「くねくね」「八尺様」など新たな「妖怪」が次々と誕生している。北米でもマッドガッサーからスレンダーマンまで都市伝説キャラクターは豊富である。無論、中国でも地方都市には伝承の妖怪が現代化したものが確認できる。例えば河南省出身の学生は頭が猫で身体が猴の「老猫猴」なる妖怪について語った。子供が騒ぐと「老猫猴が食べに来るぞ」と脅かすという。

とすれば、この非キャラクターな傾向が北京の特徴なのか、あるいはただ調査が不十分なのかは今後の課題としたい。

しかし、北京の都市伝説はキャラクター性が希薄な印象とは別に、宮田登の言う「場所性」はむしろ強固である印象だ。【表1】は同サイトで閲覧できた都市伝説三十二話の舞台となっ

た「場所」の一覧である。場所が特定できないのは四話のみで、残る二十八話は明示されている。

「場所性」に注目して集計すれば、以下の通りとなる。

建造物	8
大学	6
ストリート（通りの一角など）	3
その他の場所（公園等の空間）	3
病院	2
地域（区などの全体）	1
場所特定できず	4
交通網	5

故宮や隆福寺、あるいはジンソン・ゴーストタワーなど著名な建造物にまつわるものが多いが、大学と病院は別立てとした。大学が多いのはオンライン上でも伝承者に大学生が相応にいる

1 紫禁城（建造物）	17 崇文区永外創新里 24 院（建造物）
2 北新橋の井戸・地下鉄（交通網）	18 北京大学 58 寮トイレ（大学）
3 財石口処刑場（その他の場所）	19 北京大学 太陽温室（大学）
4 隆福寺（建造物）	20 北京大学第 6 教育棟 115 教室（大学）
5 勁松鬼楼 ジンソン・ゴーストタワー（建造物）	21 八達嶺高速道路（交通網）
6 万寿山・仏香閣（建造物）	22 ハー湖（その他の場所）
7 北京の最終 330 番バス（交通網）	23 北京某カラオケ店（建造物）
8 4 号館 4 階女子寮 水室（大学）	24 市街地のはずれ（場所特定できず）
9 朝内大街 81 号（交通網）	25 北京師範大学トイレ（大学）
10 東直門の簋街（ストリート）	26 幼年期・高校時代故郷（場所特定できず）
11 西單市小石虎胡同 33 号曹雪芹（建造物）	27 北京象山私立学校（大学）
12 虎坊橋湖广会馆（建造物）	28 密雲市場（ストリート）
13 北京地下鉄（交通網）	29 同僚の話（場所特定できず）
14 北京市西城区六陰街 2 号トイレ（ストリート）	30 延慶区落雷事件（地域）
15 恭王府花庭（その他の場所）	31 幽霊の悪口（場所特定できず）
16 北医三院（病院）	32 東方病院（病院）

表 1 北京都市伝説の場所性

ことを物語っていると仮定できよう。

その中で北京の特徴的な「場所性」が、先の「北京最終バス」の如く、バス路線や鉄道など交通網にまつわるものである。北米の都市伝説でも「消えたヒッチハイカー」を始め、全米で最も呪われた道路「リバーデール・ロード」など、ハイウェイや道路にまつわるものも少なくない。日本では明治期、鉄道網の拡大とともに、汽車に化した狸と本物の汽車が衝突する都市伝説が流布した。とはいえ、交通網を「場所性」とする点は、サンプル数は少ないとはいえ北京都市伝説の仮説的な特徴ではないか。

4 心意現象としての都市伝説

さて、このような予備的考察を踏まえた上で、二〇一六年十二月から二〇一七年十一月にかけて当時、北京外国語大学日本語学科の外国人教員であった浅野龍哉あさの たつやの指導の下、彼のゼミ生を対象に行われた都市伝説調査の結果を分析したい。当時を思い起こすと、当初は「幽霊」、つまり中国語の「鬼グイ」ということばを使うことを学生はかなり躊躇ちゅうちよし、imageと英語で表現したのが、まず、興味深かった。都市伝説は迷信の一種として、教室という公の場で語ることを忌避きひする傾向にあったのだ。それでも北京の外部から入学した少数民族の学生が、促されて故郷の都市伝説を紹介し始めたのが口火くちびを切る形となり、大学にまつわる話に及ぶ

と、北京外大の学校内だけでなく周辺の大学の例まで次々と「大学の都市伝説」がまず語られた。寮生活をする北京の大学にあっては、寮や大学内の都市伝説を新入生に語ることは、一種の加入儀礼としての趣があることもうかがわれた。「大学」という生活空間には、学生たちの伝承文化が形成されており、それ自体が民俗学の一つの対象となる印象さえあった。

最終的にはゼミ生を中心に、学生や親族、知己^{ちぎ}、一部は街頭でのヒアリングを含め、北京内外の一二〇話程度の都市伝説が集まったが、その中で、第一次調査（二〇一六年十二月）で集まった三十六話を中心に今回は解析の材料とする。いずれも場所性が明確なものである。先に示したオンラインの投稿と重なるものも少なくなく、この三十六話は二〇一〇年から調査終了の二〇一七年時点までの代表的な都市伝説といえるだろう。

その上で、これらをひとまとめで解析するために第一次調査で得た三十六話に暫定的なナンバリングを施し、それぞれのナンバーを北京の地図にマッピング、すなわち舞台となった場所に記載していった（巻末の「北京都市伝説集」の1から36に相当する）。

このような手続きによって、都市伝説から説話ごとの場所性でなく、北京全体が都市伝説を介していかに読みとられたかが可視化できると考えたからである。類似したマッピングは、柳田國男『遠野物語』収録の説話の「場所」を地図上に落とし込んだものが、観光地としての遠野のガイド的なアイテムとしてつくられている。その援用である。妖怪出現地点をマッ

ピングすることで明治後期、当時の人々がいかに生活空間を意味付けしていたのか、その古層が浮かび上がる点で観光ガイドとしては優れている。

ところで、宮田登が都市伝説は都市住民の「心意」の問題だと論じたことは既に触れた。

この「心意」という語は、柳田國男が民俗資料を三つに分けた、いわゆる三大部分類に由来する。第一部が有形文化、第二部が言語芸術、第三部が心意現象となる。第一部は有形文化として「目に映る」ものだから、研究者が旅人として通り過ぎても観察可能な「旅人の学」である。第二部の言語芸術は「耳」で採集する必要があるのでその地に一定期間、留まる必要がある「寄寓者^{きゆうしや}の学」となる。そして第三部の心意現象は、そこに生きる者にしかわかりえぬ「同郷人の学」としてある。このように、資料の属性ごとに研究者の適性が語られる（柳田、一九三四）。

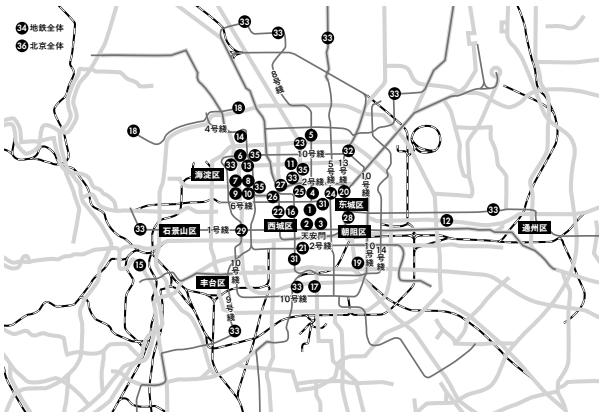
この分類に従うと都市伝説／世間話は第二部の言語芸術に思えるが、それは昔話や語り物としての形式化されたものが対象である。口頭の都市伝説はいわば「物語」未満の「情報」に近く、第三部の心意現象に分類されるだろう。

そうだとした時に、当時、外国人教員として新米の「寄寓者」である浅野、ふらりと北京に遊びに訪れる「旅人」としての大塚はともに「心意」の研究者として不適格である。つまり、北京都市伝説一つ一つの繊細な意味や場所性を読みとる文脈を私たちは有しない。だか

ら先に『遠野物語』観光マップの例を引き合いに出したのは、このような三部分類論に基づいた時、私たちが北京都市伝説を「旅人」の視点から見るのに有効な手法ではないかと仮説したからである。

5 都市伝説に見る北京の「ウチ」と「ソト」

その結果として得られたのが「MAP-1」である。そもそも、北京という都市空間を外来者が大まかに把握しようとした場合、様々な方法があると思うが、地下鉄10号線を含む環状の道路が同心円を描き、そしてその中心を東西に地下鉄、1号線が通じるというイメージ【図2】が一つある。北京在住の人々にしてみればあまりに大雑把だろうが、そのような外来者の世界認識においては、地下鉄1号線は北京を南北に二分割するラインでもある。そして、この1号線には都市伝説がまわりつく。予備的調査でも既に以下のような都市伝説が得られていた。



【MAP-1】北京都市伝説の配置図

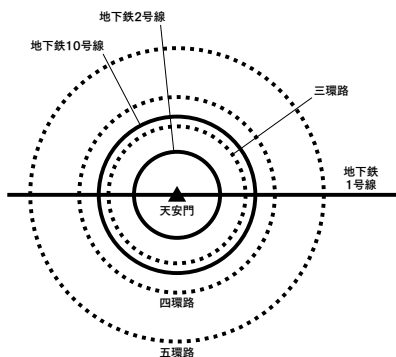
〈39 1号線の幽霊伝説〉

地下鉄1号線の工事をした時、大量の死体や骨が出た。死者の魂たちは帰る場所がなくなってしまい、工事を阻止しようとして、事故などが多発した。そのため、僧侶を呼び、法事をしてもらった。そこで「23時以降は地下鉄を止めて、魂たちが元の場所へ帰る時間とする」という取り決めに交わされ、工事はうまくいった。これが、今現在も23時以降は電車が走らない理由だという。

すなわち、1号線は死者の魂の通路であるわけだ。

三十六話の都市伝説の分布を見る限り、地下鉄1号線より北に偏っている。これは北側に北京大学、清華大学^{せいか}、北京師範大学、北京外国語大学など、都市伝説の伝承の場である大学が分散していること、そして調査者である大学生の生活圏の偏りがバイアスとして作用している可能性もある。しかし、1号線によって北京が二つの世界に分割されている可能性を都市伝説分布の偏りは暗示しているとも取れる。

これら北部の大学の都市伝説は大学の特定の場所が「死者」によって徴^{しるしづ}付けられている点



【図2】北京の同心円イメージ

次世代による次世代のための

武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていききたい。若い力で、世界を変えていききたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」、としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文

